

I 第一朗読（出エジプト記22章21―27節）

21 寡婦や孤児はすべて苦しめてはならない。22 もし、あなたが彼を苦しめ、彼がわたしに向かつて叫ぶ場合は、わたしは必ずその叫びを聞く。23 そして、わたしの怒りは燃え上がり、あなたたちを剣で殺す。あなたたちの妻は寡婦となり、子供らは、孤児となる。

24 もし、あなたがわたしの民、あなたと共にいる貧しい者に金を貸す場合は、彼に対して高利貸しのようにしてはならない。彼から利子を取ってはならない。25 もし、隣人の上着を質にとる場合には、日没までに返さねばならない。26 なぜなら、それは彼の唯一の衣服、肌を覆う着物だからである。彼は何にくるまて寝ることができらるうか。もし、彼がわたしに向かつて叫ぶならば、わたしは聞く。わたしは憐れみ深いからである。

27 神をのしってはならない。あなたの民の中の代表者を呪ってはならない。

言葉の解説 ■ 出二〇22から二三33は、王制以前にさかのぼる可能性のある古い掟集であり、シナイ

契約を述べる二四3以下で、契約の際に朗読されたとする法との関係から、「契約の書」と呼ばれる。

今週の朗読は社会的弱者に対する配慮を求める人道的な律法。

21節 ■ 「寡婦や孤児」。家長中心の社会にあつては、夫を亡くした寡婦や父親のいない孤児は惨めな生活余儀なくされた。レビラト婚の制度もあつたし、親類による保護を期待することもできたが、それがいつも現実となるとはかぎらない。■ 「苦しめてはならない」。ここに使われた動詞アーナーから派生した名詞アーニーが24節の「貧しい者」。

22節 ■ 「わたしに向かつて叫ぶ」。寡婦や孤児が親族や他人からの保護を受けることができなければ、神に叫ぶより道がなかった。

23節 ■ 「あなたたちの妻は寡婦となり、…」。寡婦や孤児に対する罪が同等の罰をもたらす。

24節 ■ 「わたしの民」。Y H W Hの民ではない民族の場合は高利貸しが存在するが、Y H W Hの民にはそれはあつてはならない。■ 「高利貸しのようにしてはならない」。直訳は「貸す者のようになつてはならない」。貸すことを商売とするような者のこと。

26節 ■ 「わたしは憐れみ深いからである」。ここで「憐れみ深い」と訳されたハツヌーンは常に神に使われる形容詞であり、神の民への基本姿勢を表す言葉。

II 第二朗読（テサロニケの信徒への手紙1・2章1―8節）

1 兄弟たち、あなたがた自身が知っているように、わたしたちがそちらへ行つたことは無駄ではありませんでした。2 無駄ではなかったどころか、知つてのとおり、わたしたちは以前フィリピで苦しめられ、辱められたけれども、わたしたちの神に勇気づけられ、激しい苦闘の中であなたがたに神の福音を語つたのでした。3 わたしたちの宣教は、迷いや不純な動機に基づくものでも、また、ごまかしによるものでもありません。4 わたしたちは神に認められ、福音をゆだねられているからこそ、このように語っています。人に喜ばれるためではなく、わたしたちの心を吟味される神に喜んでいただくためです。5 あなたがたが知っているとおおり、わたしたちは、相手にへつらつたり、口実を設けてかすめ取つたりはしませんでした。そのことについては、神が証ししてくださいませ。6 また、あなたがたからもほかの人たちからも、人間の誉れを求めませんでした。7 わたしたちは、キリストの使徒として権威を主張することができたのです。しかし、あなたがたの間で幼子のようにになりました。ちょうど母親がその子供を大事に育てるように、8 わたしたちはあなたがたをいとしく思つていたので、神の福音を伝えるばかりでなく、自分の命さえ喜んで与えたいと願つたほです。あなたがたはわたしたちにとって愛する者となつたからです。

Ⅲ福音(マタイ22章34-46節)

34 フアリサイ派の人々は、イエスがサドカイ派の人々を言い込められたと聞いて、一緒に集まった。35 そのうちの一人、律法の専門家が、イエスを試そうとして尋ねた。36 「先生、律法の中で、どの掟が最も重要でしょうか。」37 イエスは言われた。『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』38 これが最も重要な第一の掟である。39 第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』40 律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている。」

41 フアリサイ派の人々が集まっていたとき、イエスはお尋ねになった。42 「あなたたちはメシアのことをどう思うか。だれの子だろうか。」彼らが、「ダビデの子です」と言うと、43 イエスは言われた。「では、どうしてダビデは、霊を受けて、メシアを主と呼んでいるのだろうか。」44 『主は、わたしの主にお告げになった。

「わたしの右の座に着きなさい、わたしがあなたの敵を

あなたの足もとに屈服させるときまで」と。』

45 このようにダビデがメシアを主と呼んでいるのであれば、どうしてメシアがダビデの子なのか。」46 これにはだれ一人、ひと言も言い返すことができず、その日からは、もはやあえて質問する者はなかった。

語句の解説

34節「フアリサイ派の人々」。並行箇所のマコ二28には、フアリサイ派は登場しない。マコ三22では、

「ベルゼブルに取りつかれている」とか「悪霊の頭の方で悪霊を追い出している」と言ったのは、「エルサレムから下って来た律法学者たち」だが、マタ二24は、これをもフアリサイ派の発言としている。マタ一五1以下では、イエスがフアリサイ派と律法学者に、「自分の言い伝えのために、神の掟を破っている」と言い、彼らを口先では神を敬うが、心は遠く離れている「偽善者」と非難している。

マタ一五12には、このときフアリサイ派がつまづいたことが述べられているが、マルコの並行箇所にはこのような言及はない。マタイでは、フアリサイ派はイエス殺害の主導権を握った人たちだとされており(二14、二15)、この箇所にもその理解が現れている。▼「イエスがサドカイ派の人々を言い込められた」。直訳「サドカイ派の人々を彼が黙らせた」。「黙らせる」という動詞は、申二五4では牛に「口籠をはめて、口をふさぐ」の意味で使われている(1テモ五18)。そこから転義して「黙らせる」の意味になる。イエスが汚れた壺(マコ一25、ルカ四35)や荒れる湖(マコ四39)を静めるときにもこの語が用いられている。マタイでは二回用いられているが、いずれも22章に現れる。二12では、王が催した王子の婚宴に礼服を着けずに来た人が「黙っていた」とあり、もう一回がこの箇所である。ここではサドカイ派の人々をイエスが黙らせる。

サドカイ派はイエスの時代のユダヤ教の三大党派の一つである。この派には祭司階級や地主階級が

マルコ12章23-37節

28 彼らの議論を聞いていた一人の律法学者が進み出、イエスが立派にお答えになったのを見て、尋ねた。「あらゆる掟のうちで、どれが第一でしょうか。」29 イエスはお答えになった。「第一の掟は、これである。『イスラエルよ、聞け、わたしたちの神である主は、唯一の主である。30 心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』31 第二の掟は、これである。『隣人を自分のように愛しなさい。』この二つにまさる掟はほかにない。」32 律法学者はイエスに言った。「先生、おっしゃるとおりです。『神は唯一である。ほかに神はない』とおっしゃったのは、本当です。33 そして、『心を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして神を愛し、また隣人を自分のように愛する』ということは、どんな焼き尽くす献げ物やいけにえよりも優れています。」34 イエスは律法学者が適切な答えをしたのを見て、「あなたは、神の国から遠くない」と言われた。もはや、あえて質問する者はなかった。

35 イエスは神殿の境内で教えていたとき、こう言われた。「どうして律法学者たちは、『メシアはダビデの子だ』と言うのか。36 ダビデ自身が聖霊を受けて言っている。

『主は、わたしの主にお告げになった。

「わたしの右の座に着きなさい。

わたしがあなたの敵を

あなたの足もとに屈服させるときまで」と。』

37 このようにダビデ自身がメシアを主と呼んでいるのに、どうしてメシアがダビデの子なのか。」大勢の群衆は、イエスの教えに喜んで耳を傾けた。

多く、その教説は保守的であり、刷新を嫌った。サドカイ派にとつては、モーセ五書のみが唯一の權威であり(マコ二26)、ファリサイ派が重視した口伝律法を認めず、復活をも否定していた(マコ二18、使二三8)。

サドカイ派は、今週の福音の直前の段落で(23―33節)、兄弟の一人が子を残さずに死んだとき、残された兄弟が親族はその妻と結婚して子孫を残すというレビラト婚の規定を利用して、イエスに復活に関する議論を持ちかける。イエスは「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ」と答える(32節)。聞いていた群衆は「驚く」が(33節)、サドカイ派は沈黙させられる。▼「一緒に集まった」。直訳「ひとつところに集まった」。詩二2の七十人訳には「支配者たちは主に逆らつて、主のメシアに逆らつて、ひとつところに集まった」とある。マタイはこの詩編を念頭に置いていると思われる。マコ二28にはこの表現はない。マタイの描くファリサイ派はイエスに敵対するという点で、サドカイ派と共同戦線を組む(二六一―12)。そのことに注目すれば、サドカイ派が沈黙させられたと聞いて、ファリサイ派が「ひとつところに集まった」のは、サドカイ派を冷笑するためではなく、イエスに対する戦線を整えるためであらう。

35節「そのうちの一人、律法の専門家が」。直訳「彼らの中の一人が 律法の専門家が」。「律法の専門家」はノミコスというギリシア語。並行箇所のマコ二28ではグラムマテウス(律法学者)が用いられている。ノミコスとグラムマテウスには特に意味の差はない。しかし、マコ二28では「律法学者たちの一人」であつて、どの派に属する律法学者であるかは明らかではない。これに対して、マタイでは「ファリサイ派の中の一人、律法の専門家」であり、ファリサイ派に属していたことが明確にされている。さらに、マコ二28―34では、律法学者とイエスの会話は決して敵対的ではないが、マタイでの律法の専門家は、イエス殺害をもくろむ「ファリサイ派」の一人であり、「イエスを試そうとして」尋ねたとされており、彼の質問には悪意が込められていることになる。

36節「どの掟が最も重要でしょうか」。直訳「どの掟が大きい」。これは「どんな種類の掟が大きい」と訳すこともできる。「大きい」は原級の形容詞だが、最上級の代用と解釈することもできる。この問いが「どの掟が最も重要か」の意味であれば、ファリサイ派が仕掛けた罠は、最も重要な掟をイエスに述べさせることによって、六一―三箇条の掟すべてを守ろうとするフビの努力を無意味なものと批判させることにあるのかも知れない。

37節「心……精神……思い」。直訳「心……魂……思い」。これらの語は意味を区別して使い分けられているのではなく、ほぼ同じ意味だと思われる。

39節「第二も、これと同じように重要である」。直訳「第二はこれに似ている」。「似ている」はマコ二31にはない。これを加えることによって、隣人愛は神への愛と同価値であり、決して劣ってはいないことを明確にしている。

40節「基づいている」。直訳「掛っている」。この動詞は石臼を首に「かける」とか、腹が手に「ぶらさがる」とか、イエスを木に「かける」の意味で使われる。聖書が教えるすべての掟はこの二つの同等の愛に「掛っています」。他のすべての掟を守るとき、この愛の心を欠いているなら、無意味なものとなる。愛がすべての掟の根拠であり、いのちである。

① 34―40節の構成の解説

第一段落(34―36節)

並行箇所のマコ二28―34と比較すると、次のような相違がある。

① マルコでは、イエスとサドカイ派の議論を聞いていたのは「律法学者の一人」だが、マタイでは「ファリサイ派の人々」。

② マルコでは、サドカイ派の復活についての問いに「イエスが立派に答えた」のを見て、律法学者が尋ねる。それに対して34節では、サドカイ派をイエスが「黙らせた」と聞いて、ファリサイ派は「ひとつところに集まった」と述べられている。

③ 35節の「試そうとして」と36節の「先生」という呼びかけはマルコにはない。

これらの相違に注目すると、マタイの主張がはっきりと見て取れる。マタイが描くファリサイ派はイエスの敵役を一身に背負っている。マタイはマルコには現れないファリサイ派をここに登場させることによって、この場面でのイエスへの敵対感情を強調している。

また、「黙らせた」という語は、イエスに敵対する汚れた霊に「黙れ」と命じ(マコ1:25、ルカ4:35)、荒れる湖に「静まれ」と命じるときに用いられている(マコ4:39)。イエスがサドカイ派を「黙らせた」とは、単に「言い込めた」というのではなく、汚れた霊や荒れる湖のようにイエスに敵対する心を「黙らせた」ということなのであろう。

教義や律法理解の上では対立するファリサイ派とサドカイ派は、イエスに敵対することでは仲間である。イエスがサドカイ派を「黙らせた」と聞いたファリサイ派は、イエスを「試そう」として「尋ねる」「試す」という語は、必ずしも「悪意をもって試す」という意味ではない。しかし、マルコとの相違を考慮すると、ここでの「試す」には悪意が込められているだろう。しかも、彼らは悪意を隠して、イエスを「先生」と呼び、教えを乞う姿を装う。マルコは「一人の律法学者が…:イエスが立派に答えたのを見て尋ねた」と述べており、しかも「先生」と呼びかけることなく、イエスに掟に関する質問をさせている。マタイでは、「先生」と呼びかけさせることによって、イエスへの皮肉と下心が表されている。このように、マタイではマルコとは違って、ファリサイ派の敵対感情が強調され、36節の問いがイエスを陥れる畏とされていることが分かる。

36節の「どの掟が大きいか」は、「どのような類の掟が大きいか」の意味にもなる。その場合、ある掟が重要な掟に数え上げられるための特徴や性質が尋ねられていることになる。ラビは掟を軽いものと重いものに分けることに関心を持っていたから、ラビの見方からすれば、この問いは「どのような類の掟が重要か」の意味になるだろう。しかし、37節以下のイエスの答えから見れば、「どの掟が最も重要か」と尋ねられたことになる。

第二段落(37―40節)

36節の問いが重要な掟の特徴や性質を尋ねているなら、この問いと37―40節のイエスの答えには隔たりがある。この隔たりは、歴史的には全く別の機会に語られたイエスの言葉が、ファリサイ派との論争の場面に組み入れられたことによって生じた説明することができる。いずれにしても、マタイはイエスの言葉を神学的な議論ではなく、弟子への励ましとして聞こうとしている。だから、39節にマルコにはない「似ている」を用いて、「第二の掟は第一の掟に似ている」と述べ、さらにマルコには欠けている「これら二つの掟に律法全体と預言者たちは掛っている」(40節)を加えている。これは掟の順位づけという神学的な議論には興味がないこととしるしである。神への愛と隣人愛とは実は一つであり、そのような愛がすべての掟を包み込む中心理念であることを述べ、神が示した愛に答えるようにと求めている。

② 34―40節の解説

山上の説教の中で、イエスは「律法と預言者を完成するために来た」と語った(五17)。その「律法と預言者は神への愛と隣人愛に掛っている(基づいている)」とイエスは教える。

律法の中で最も重要な掟(34―36節)

ファリサイ派は、イエスがサドカイ派を「黙らせた」と聞いて、「ひとつところに」集まる。彼らの目的はイエスを「試す」ことにある。ファリサイ派の一人である律法の専門家は、「先生、律法の中で、どの掟が最も重要でしょうか」と尋ねる。ファリサイ派は書かれた律法のほかに、「言い伝え」られた律法を守ることを教えていた。彼らはすべての律法を守ろうと努力し、それを誇りにしていたから、イエスの弟子が手を洗わずに食事をしたことを責め立てる。そのとき、イエスは「自分の言い伝えのために神の言葉を無にしている」と言って、彼らを非難している(一五6)。「神の言葉を無にしている」彼らの正体を、イエスはここでも暴き出す。

律法全体と預言者(37―40節)

律法の専門家は「律法の中で、どの掟が最も重要でしょうか」と尋ねたが、イエスは「これら二つの掟に律法全体と預言者たちは掛っている」と答える。問いにはない「預言者たち」をイエスはなぜ加えたのだろうか。

「律法全体と預言者」は旧約聖書を表す表現である。その場合の「預言者」には、いわゆる

預言書だけでなく、ヨシユア記、士師記、サムエル記、列王記など、土地取得以降のイスラエルの歴史を書いた歴史書も含まれる。歴史を作り上げるのは神と人であり、両者が絡み合っただけの歴史が形作られてゆく。歴史書が「預言者」に含まれているように、神の言葉は歴史と無関係に捉えられるべきではない。預言書も同様である。預言とはある特定の時代に預言者を通して語りかける神の言葉だが、それを理解させるのは歴史の事実である。神の言葉が歴史と切り離されるなら、単なる抽象に終わり、人を生かす具体的な力にはならない。「預言者たち」とはそのような書物の総称である。

そうであれば、イエスは「預言者たち」を加えることによって、フアリサイ派が律法を歴史の具体的な状況から切り離し、抽象に陥っていることを批判していることになる。フアリサイ派は神を愛すること、隣人を愛することを含め律法を守っていることを誇っているが、それは、神や隣人を利用して、「愛する」自分を誇っているにすぎない。神が歴史の中で行った救いの業に神の愛を見て取ることができるなら、律法は束縛ではなく、救いの喜びを表すための行いとなる。フアリサイ派の教えが人々にとって負い切れない重荷となったのは、歴史に起こされた神の業から目を離し、文字としての律法にこだわったからである。

今週の福音のまとめ
神への愛と隣人への愛はひとつのもの。「隣人」というギリシア語は「近くに」を意味する語である。神は苦しむ人間を見捨てず、歴史の中に救いの出来事を起こす。その神の愛が「近くに」あるとき、私たちは隣人を愛することができる。隣人愛は、神が私たちを愛したことへの返礼だからである。

③福音の言葉から——「掛っている(クレマンニューミ)」——

他動詞として「掛ける・つるす」、自動詞として「掛かっている・つるしてある」を意味する。新約聖書には7回の用例がある。

①文字通りに。イエスは「わたしを信じるこれらの小さな者の一人をつまずかせる者は、大きな石臼を首に懸けられて、深い海に沈められる方がましである」と述べる(マタ一八6)。マルタ島の住民たちは、パウロの手に絡みつき「ぶらさがった」蝮を見て、パウロが人殺しにちがいないと言い合う(使二八4)。

誰かを「木に掛ける」という言い回しは、旧約聖書では処刑された者の死体を木につるすことを表す。申命記二二22以下は、「ある人が死刑に当たる罪を犯して処刑され、あなたがその人を木に掛けるならば、死体を木にかけたまま夜を過ごすことなく、必ずその日のうちに埋めねばならない。木にかけられた死体は、神に呪われたものだからである」と述べている(創四〇19、エス八7も参照)。

新約聖書では、この言い回しがイエスの十字架架刑に当てはめられる。最高法院に引き出されたペトロをはじめとする使徒は、「わたしたちの先祖の神は、あなたがたが木につけて殺したイエスを復活させられました」と述べ、自分たちの宣教について弁明する(使五30、39も参照)。ルカ二三39は、イエスと一緒に十字架につけられた犯罪者にこの動詞を使う。律法の行いではなく、福音への信仰によって人は義とされると教えるパウロは、申二二23をキリストの十字架に当てはめ、「キリストは…わたしたちを律法の呪いから贖い出してくださった。『木にかけられた者は皆呪われている』と書いてあるからです」と述べる(ガラ三13)。

②転義して。今週の福音では、最も重要な掟は何かと尋ねられたイエスが、神への愛と隣人への愛を命じた二つの掟(申六5、レビ一九18)を挙げ、「律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている」と答える(40節)。ドアが蝶番にかかっているように、律法全体と預言者(旧約聖書全体)は二つの掟に「かかっている」。別の動詞を使った類似の表現は、ガラ五14、ロマ一三8—10にも見られる。